《講 演》

「平安前期における中国陶磁と日本陶磁との関係」

三　上　次　男

私に与えられた題目は、極めて大きな題目でありまして、「中国陶磁と日本陶磁との関係」でありますが、もとよりこのわずか20分程度では、到底このような問題を詳細に話すことが出来ませんので、極めて簡略になるかと存じますけれども、考えたことを申し上げてみたいと思います。

これまで、昨日から、細かい、非常に密度の高い話を伺っておりましたので、私の話は、皆様の肩のこりをほぐすような、少し大雑把な話にいたしたいと思います。

中国陶磁と日本陶磁の関係は、極めて重要な問題でありますし、また、その関係は複雑でありますが、今日は、今回のシンポジウムと関連いたします、大体、9世紀・10世紀・11世紀の3世紀間の中国陶磁と日本陶磁との関係に限定してみたいと思います。それには、まず第1に、9世紀・10世紀・11世紀頃の中国陶磁のあり方はどんなであったかという問題があります。次に、これらの中国陶磁が、どのようにして日本に輸入されていたか、どのような種類のものが日本にもたらされていたかという問題があります。さらに、第3は、日本に請来された、あるいは、日本人が求めた中国陶磁のコピーというものは、どんなものであったかということに問題が絞られると思います。

さて、その9世紀・10世紀・11世紀の中国陶磁がどんなものであったかということも、これはまた、極めて広い問題でありまして、ちょっと簡単に申し上げることはむずかしいのでありますが、極めて大雑把に申しますと、9世紀は唐の後半、と申しますよりは、唐の後期、10世紀が五代、11世紀が北宋に当ります。

まず、唐の後期の中国の状態はどうだったかと申しますと、基本的には、中国の北部、華北では白磁と黒磁系統のものが沢山作られておりました。それに対して、当時なお、中国の南部――揚子江流域以南――では、青磁系統のものが大量に作られていたのであります。その白磁にいたしましても――これを中国では、北の白磁・南の青磁というようなことを申しますが――、実は、決してその期の北方においては、白磁ばかりではなく　黒磁――黒釉陶磁ですね、これが大量に作られております。私たちは、中国の北方と申しますと、まず、白磁を思い浮べるのでありますが、生産量という点から考えますと、むしろ黒磁の方が多いと考えてもいいくらい、大量に方々の窯で黒磁が作られております。大体において、白磁を作る窯では、黒磁も焼いている。場合によると、黒釉あるいは、黒褐釉の製品の方が、一つの窯では、白磁より多いといっていいのではないかと思うほどであります。これは、いくらか余談になりますが私、ごく最近、中国の方へまいりまして、鞏県窯――唐三彩を焼いているので有名な窯ですが――を見てまいりました。そこでは、唐三彩ばかり焼いているものと思っておりましたところ、実際に、その窯で一番大量に焼いているのは、白磁でありまして、同時にそこからは、黒磁・褐釉磁・黄釉磁・緑釉磁が出土しているのです。10片の内で1片か2片の三彩が混じるという程度であります。でありますから、北の白磁と申しましても、白磁ばかり焼いているわけではなくて、実際には、黒磁、褐釉磁などを一緒に焼いているのです。その状態は、9世紀まで続いております。

さて、その白磁の窯でありますが、これも大変有名なのは、先程、邢州白磁という名前で呼ば

れております白磁であります。これは、もう唐の時代の文献（陸羽著『茶経』ほか）にもありまして、当時、中国の国内至るところで珍重されたのでありますが、一邢州は、河北省の唐代の一つの州です。――これまで、それほど有名な窯の製品にもかかわらず、窯の実体が判らなかったのであります。しかし、この3月に、初めて判りまして、中国研究者によって、発掘調査されました。その陶片を見せてもらいましたところ、非常に優れた、美しい白磁であります。素地が真白で、まるで磁器のように白い。おそらく、白磁の磁胎もですね、釉も無色透明で邢州の白磁は雪のようだと、唐の時代にいわれておりますが、まさに、雪のような白さを持った、極めて良質な白磁が邢州で焼かれていることが判りました。しかし、実際には、北の方の白磁は、邢州ばかりではございません。河北のあちらこちらで、白磁が生産されています。今申しました邢州白磁というのは、河北省、――あの北京に近い方でありますが――同じ河北省にいたしましても、定窯――定州――であるとか、あるいは、その他の、後の磁州窯の前身になりました所でありますとか、あるいは、次の宋の時代には有名な青磁窯に変わりましたが、陝西省の耀州窯――唐の時代には銅川窯と申しましたが――そこでも、大量に白磁と黒磁を焼いています。さらに、先程申しました河南の、鞏県窯でも白磁を焼いているし、もっと南に下りますと、安徽省寿県の白土窯でも黒磁とともに、いくらか焼いていますし、さらに、もっと揚子江を越えた南の方でも、実際、白磁を焼いています。例えば、長沙銅官窯や、もっと西の、四川省の邛崍窯、さらに南の広東省の西村窯でも焼いているという状態でありまして、確かに北方でいいものが出来ておりますけれども、全ての白磁が邢州で焼かれたということはいえない状態であります。

次に、南の青磁でありますが、これは、伝統的に、現在の浙江省――上海の南の、杭州という南宋時代の都のあったところがありますが、あの付近は、日本と一番関係の深い地域であります。――その浙江省を中心として、大量の青磁が焼かれています。中国の青磁の伝統と申しますのは実は、古くは、本当に青磁らしい青磁が焼けましたのは、後漢一紀元後1世紀あるいは、2世紀からであります。しかし、それ以前からも、青磁――青磁になりうる状態の、日本で申しますと灰釉ですね、まさに灰釉陶、私は釉陶と申しておりますが――釉陶は、すでに紀元前1500年、殷の中期から、青磁になりうる性格のものが出来ております。しかし、安定した青さをもった美しい青磁が出来ましたのは、紀元後1世紀ないし2世紀の、後漢の時代でございます。それ以来伝統的にですね、今申しました、浙江省という地域、ここが青磁生産の一大中心地になっております。この浙江省の青磁生産は、後漢の時代から引き続いて、魏晋南北朝――いわゆる六朝時代――、隋・唐の時代、五代、宋、それから元、明の終りまで、最近、私の調べました資料では、18世紀の中期まで浙江省で焼いていたという資料も出てまいりましたので、17～18世紀まで、連綿として浙江省で青磁を焼き続けております。さらに、浙江省のみでなく、浙江省の周辺――浙江というのは、上海の南側の大きな地域ですが――西隣りの南京のあります江蘇省、その西の有名な景徳鎮のあります江西省、それから浙江省の南の福建省、広東省などでも焼いており、ほぼ南の方を中心として生産しています。と申しましても、実は、先程の白磁と同じでありまして、青磁も決して南の専有ではありません。すでに唐の時代、さほど盛んではありませんでしたけれども、河北の諸地方で、同じように青磁を焼いております。ただ、その質は、唐代では中国南方の浙江省を中心とした地域の青磁よりは、素地におきましても、釉薬にいたしましても、技術にいたしましても、劣っている。北方青磁がより優れているとはいい難い。量も同様であります。そのような状態でありまして、基本的には、北の方では、白磁が大変多く生産されており、

南の方では、浙江省を中心として、青磁が生産されております。しかし、南でも白磁が焼かれており、もちろん黒磁も焼かれている、北の方でも青磁が焼かれている、というのが、大体、9世紀の極めて大雑把な状況でございます。

次に、9世紀の、特に猿投窯との関係が比較的深いと思われます越州窯――緑釉や猿投窯と関係の深い越州窯――これに焦点をあわせて申し上げてみたいと思います。

この越州窯の場合は、――私たちは、（日本では）越州窯と申しますと、大体、浙江省で生産された青磁のことを想ってしまいますが――中国では、いくらか言葉の使い方が違いまして、越州窯という言葉は使っていません。その浙江省自体にですね、陶磁器の大生産地を3か所ばかり設定いたしておりまして、中国では越州窯でなくて、越窯と申しますが、現在の杭州湾の南岸地帯、最も良質の古代青磁を焼きました地域の製品を越窯と申しております。同じ浙江省でもその中央部の金華（きんか）県とか武義（ぶぎ）県とか、そういう地方で作られましたものを、婺（ぼう）窯と呼んでおりますし、さらに、東南の海岸地帯の温州――日本では温州みかんという名で知られております――甌（おう）江という河の河口に温州という州がありますが、その近くにも一群の青磁生産地がありまして、その辺で作られましたものは、甌（おう）窯というふうにいっております。

今申しましたそれが、大体、9世紀・10世紀の状況でありますが、11世紀になりますと、今度は、青磁の生産地の中心が既往のところを離れてまいりまして、甌江の上流地帯と山奥の方の龍泉（りゅうせん）県というところに移ります。その龍泉県の方にまいりまして、そこで大量の青磁生産が行われます。日本の皆さんが、龍泉窯とおっしゃるのが、それであります。そのように大体、9世紀―10世紀頃から、今の越窯・婺（ぼう）窯・甌（おう）窯という地域で青磁が盛んに生産されておりますが、その地域で生産されました9世紀頃のものは、まだいろいろな器形がございまして、注口や水差しもあれば壷もあり、いろいろなものがあります。一番数が多いのは、いうまでもなく、鉢・皿類、むしろ鉢・碗類であります。その鉢・碗類の一番大きな特色は、鉢・碗類の高台部が、非常に幅の広い、日本で申します、蛇ノ目高台という形式のものであることです。中国では、これを玉璧（ぎょくへき）形――璧（へき）という玉で作りました中央に孔のある丸い器がありますが、それに似ておりますので玉璧形高台といっております。これが圧倒的に多いのであります。そのほかに、いくらか後の、輪高台のような玉璧形よりはもっと幅の狭いものもありますが、大体において、高台の幅が広い。それから、先程話に出ました、口縁部が肥厚している、いわゆる玉縁ほどは肥厚しておりませんけれども、――中国では、それをなかなかいい言葉を使っていまして、唇口（しんこう）といっております。これの方が感じが出るのですが、――唇口形という、ちょっと折り曲げて、丸い口縁部を作る特徴をもっています。そういうのが、9世紀の越窯での一つの特色でございます。ただいま申しました、鉢・碗類の器形は、当時9世紀における中国の流行であります。決して、越窯ばかりでなく、先程の邢州白磁にいたしましても、南方の白磁にいたしましても、大体9世紀の中国の製品は、鉢の場合そういう器形の特徴をもっています。一種の流行であります。流行ということは、大変大きな力をもっているものだと思います。この9世紀頃のものを見ておりますと、色は、越州窯の場合ですと、オリーブ・グリーン、まだ充分青くない、いくらか「黄色味を帯びた青」といっていいような色をいたしております。しかし、文様はほとんどございません。ただ、最近発見されました850年、9世紀の中頃の墓の副葬品にみられるのでありますが越窯の鉢の内面にですね、褐彩一褐色の色で花文様を描いたものが発見されております。今一番古いのが、850年のものでありますが、大中4年かと思うのでありますが、初めは、比較的少数しか見つかっており

ませんでした。しかし、最近の中国の発掘調査が進むにしたがって、こうした、内面に褐彩で花文様――ちょうど下（今回の「猿投窯展」展示室）で見ておりますと、例の猿投ですか、緑釉椀ですかに、緑彩で文様を描いているものがありますが――あれと同じような文様を付けたものが、9世紀の中期から出てくるということが判ってまいりました。

いま一度越州窯中心に申しますと、10世紀の前半くらいまでの鉢は、ほぼ今申し上げたような蛇ノ目高台、幅の広い高台のものが主流を占めてまいりますが、10世紀の中頃ぐらいから器形がだんだん変わって、高台の幅が狭くなってまいります。輪高台のような形にだんだん移り変わってまいります。これも実は、単に越州窯ばかりじゃなくて、景徳鎮の白磁も同じ状態でありますし、華北の白磁も同じ状態で変わってまいります。と同時に、特に越州窯に著しい例でありますけれども、文様が簡単な刻線の文様、線彫りの文様が出てまいります。刻線、線彫りでもって、牡丹の文様でありますとか、あるいは、その他、いろいろな例がございますが、一番多いのは、牡丹であります。ほかの花もありますし、あるいは動物ですと蝶々でありますとか、あるいは龍が非常に多い。日本のコピーには出てきませんが……。この龍のほか、鳳凰、鳥、それの組合わせといったものを刻線で、細い線で描くようになってまいります。さらに、それと並行いたしまして、篦彫りで今のような文様を描くというふうなことが起ってまいります。9世紀・10世紀くらいから、中国の陶磁器は、一斉に極めてにぎやかな文様で飾るようになるわけですが、これは非常におもしろい現象だと思っております。一番有名なのは、長沙銅官窯でありますが、ここでは9世紀から、9世紀初めの遺跡からはっきり出土していまして、――銅官窯は、華南の有名な長沙市の北方の窯業地でありますが、――本当に、楽しい、多様な文様を描いております。単に、鳥や花鳥や蝶などばかりでなく、人物なんかも描いたりしています。実は、9世紀・10世紀という時期がですね、アジアにおいては、大きな、社会あるいは文化の転換期なのですが、まさにその転換期にふさわしく、中国の陶磁器の様式が変わってまいります。越州窯に彩画文様が現われてまいりますのも、その一つの現われだと思います。

11世紀になりますと、越州の青磁は、甌江の上流に移動します。越窯―特に杭州湾南岸の1000年以上も隆盛を誇っておりました地域は、土や、燃料が枯渇したのだろうと思いますが、わずかに生産をつづけているだけになり、その主力は、だんだん甌江の上流へ移っていることになります。これが龍泉窯の初めでありまして、中国の研究者の中には、龍泉窯は南宋すなわち12世紀からだという人もありますが、じっさいは11世紀の後半というのが、越窯から龍泉へ移る過渡期だと思っております。

さて、今、越窯に関してだけ申しましたが、その時期の陶磁器が一体、どのように日本に関係があるのだろうかを考えてみますと、まず第1に、今申しました越窯、それから中国の9世紀以降の白磁、それから長沙銅官窯（長沙窯）の製品が、日本に輸入されていることです。これは、決して日本ばかりでなくって、朝鮮はもちろんのこと、フィリピン、インドネシア、西のペルシア、エジプトにまで同様に、一種の三点セットのような形で、越窯と長沙銅官窯と白磁が輸出されています。これは、日本の場合ももちろん御承知のようでありまして、最近の調査が進むにしたがって、方々から発見されますが、その一番多いのは、やはり西の方では博多周辺、大宰府周辺、それからこの本州では、奈良・京都で見つかっております。いちいち申し上げませんが、こういうふうに、中国陶磁が9世紀以来、少なくとも発掘報告に即して判断いたします限り、9世紀以降の日本に、貿易陶磁としてもたらされております。もちろん、それ以前にも中国陶磁はま

いっております。唐三彩が来ております。さらに、古くは、法隆寺に伝来しておりますように、越窯の四耳壷（重文、東京国立博物館保管・法隆寺献納宝物）がございます。しかし、それは貿易陶磁として来たのではなく、一種の賜与品、――唐の宮廷からもらったとか、あるいは、唐の使臣が持って来た――というふうなものでありまして、たぶん、唐三彩は宮廷用すなわち官窯的なものであったと考えられます。しかし、9世紀になりますと、今申しました三種のものが、貿易陶磁として日本へ沢山やってまいります。日本の当時の貴族、宮廷貴族は、御承知のように中国のものを極めて熱心に求めておりました。そうした求めておりましたものが、今申しましたように、奈良・京都へもたらされてきます。そういたしますと、最高の階層の連中は、それを手に入れることができますが、ほかの連中は、それがなかなかむつかしい。だから、それを日本でコピーするようなことが要求されるようになる。それで出来始めたのが、緑釉陶器であり、あるいは猿投窯であったと思っております。まさにそれは、間違いないと思います。京都周辺で発見されます、緑釉の鉢・皿を見ておりますと、形だけを見れば、これはもう中国のものと見間違うくらいよく似たものが出来ています。例の、蛇ノ目高台のものも出来ています。緑釉というのは、私はやはり青磁のコピーだと思います。コピーの問題でありますが、これは、ほとんど同時代に出来ていると考えていいんではないかと思います。私たち、遺跡からよく中国陶磁を発見いたしまして、それによって年代を考えますけれども、中国陶磁だけによるその遺跡の年代の決定というのは、かなり危険があります。中国陶磁は、非常に重要、貴重でありますから、伝世をしている場合がある。だから、それを見て、この遺跡は何世紀というふうにはいえない。ところが、コピーの場合は、おそらく輸入されたものがまもなく生産地へもたらされて、そのコピーを作ったと思います。したがって、コピーによる年代の設定の方が、中国陶磁が出た場合よりは確かだというふうに私は考えております。コピーにつきましては、エジプトでも、イランでも、全く同じでありまして、さらに、朝鮮の高麗でも全く同じであります。高麗なんかの場合には、越州で、今申しましたような形のものが出来ますと、すぐコピーを作っています。ちょっと見ただけではこれこそ本当に判らないくらいよく似たものを作っている。そういう点で、コピーの問題は、非常に重要な問題であります。

実は、どのような種類の中国陶磁をコピーしたかを具体的に申し上げようと思ったのでありますが、もう時間がとっくに過ぎてしまっていますから、猿投窯の製品は、いろんな面で中国の越州窯がコピーの中心的存在と考えざるを得ないということだけ、申し上げておきたいと思います。ただ、猿投の製品全てが中国のコピーではございません。これは、須恵器あるいは、日本在来の陶磁器の伝統というものを踏まえて、それに中国的な要素が加わったものであるということであります。

さて、猿投の陶磁器に見られます文様には、10世紀・11世紀の中国陶磁のものと全く同じようなものがございます。ちょっとそれを、スライドで御覧いただこうと思います。

（スライド説明）

(1)・最初にお目にかけますのは、寧波（ニンポー）というところであります。これは、日本の遣唐使が中国へまいりました時に着かなければならなかった明州（みんしゅう）――唐の時代、その頃はここを明州と申しましたが、――その明州の海岸であります。その周辺に、越窯の沢山の窯がございます。これが寧波であります。日本の遣唐使は、まず第1にここへ来るか、あるいは揚州へ来るように要求されております。

(2)• これが寧波の風景の一つでありまして、ちょうど、波止場にジャンクが着いております。このところは、唐の時代の港の跡だったところです。ここに和義路というのがありますが、和義路というところから、9世紀あるいは8世紀に上がるかも知れませんが、主として9世紀の陶磁器が沢山出ているわけです。ここから甬江という河をくだりまして、海に出ます。海に出ますと舟山列島というのがありまして、その舟山列島の島々をつたいながら、日本から来る。

(3)• これは、全て、和義路から出土したものです。実は、この中には長沙銅官窯の注口器があるのですが、今日はそのスライドをもってまいりませんでした。この越州窯には、直立した口縁部がついています。まさにこれは9世紀の代表的なものです。

(4)• これも全て和義路の唐末の遺跡から出たもの。

(5)• これは、非常に不思議な枕でして、下部の方は、越州窯なんです。ところが、上の頭をつける部分には、練り上げを嵌め込んでいるのです。これは、当時の高い技術を示す枕です。越州窯青磁の枕に練り上げを嵌め込んでいる。もうそういう技術があります。越州窯と練り上げ、練り上げは多分磁州窯で作ったんだろうと思いますが、こういうこともやっている。

(6)• これは、合子であります。蓋物。

(7)• これもですね。

(8)• これは越州窯ですけれども、いくらか酸化気味のものです。

(9)• 猿投に出てくるような小さな水滴であります。

(10)• これは、耳皿。こんな形での耳皿が出てきます。茶碗の托であります。

(11)• 一括遺物でありますから、大変参考になるかと思います。

(12)• これもそうですね。

(13)• その当時の窯のことを申し上げる時間がありませんでしたが、これは宜興窯を示しています。唐の時代の宜興窯の模型です。上海博物館にあります。

(14)• これから数枚は、無錫の博物館のものです。無錫へまいりました折、倉庫から出してもらって、見せていただいたのですが、やはりこれは、越窯でなく、先程も申しました婺窯（ぼうようまたはぶよう）という浙江省の中央部のもの。たくさん銘があります。

(15)• これはいくらか10世紀にかかるものだと思います。

(16)• これはむしろ11世紀。

(17)• これは、大変珍しいものでありまして、無錫の博物館にあったものです。このように、越州窯でもこういうような、縞模様ですが、褐彩でもって、釉上に文様を描いている。これは、まさに典型的な唐の越州窯です。私はボディまで非常によく見ましたけれども、越州窯です。越州窯に、こういう褐彩で描くものがある。花文様も。

(18)• これは、白磁でありますけれども、やはり無錫の遺跡から出ました10世紀の唾壺。唾を吐く道具であります。

(19)• これはもう少し後になります。11世紀。

(20)• この形式は、いままで私たちは越州窯と申しておりましたが、越窯から龍泉窯への過渡期のもの。初期の龍泉窯と越州窯とは、どっちか判らないくらいよく似ています。よほど胎土をよく見ないと判定がつかないくらいよく似たものを作っている。まさに、11世紀の越窯から龍泉への過渡期の製品でありまして、これは越窯ということになりました。

(21)• これは、余姚というところ――寧波のすぐ隣りの大変有名な上林湖の窯のあるところ――から

出ました越窯の破片で、窯跡から出たものばかりです。今のは唐代です。

(22)•これが大体10世紀初めくらい。

(23)•10世紀以降の越窯の特色は、これに見られますように、高台が弯曲して外反しているということです。しかも、作りが薄くなります。ただ、底部は厚くなりますが、器壁は薄くなりまして、高台は弯曲をしながら外反している。

(24)•これが大きな特色です。これなんかもその一つでありまして、これはその水注を入れる道具でしょうけれども。

(25)•こういうふうに外反している。

(26)•高台部の外反りは11世紀の龍泉にはございません。これは、唐末くらい。10世紀末だろうと発掘者がいっておりました。

(27)•これも10世紀末だろうと。最初はこのくらい簡単な文様ですが、だんだんいい文様になってまいります。

(28)•これも外反している。

(29)•これなんかは、大変珍しい。私、実は初めて見たモティーフなんでありますが、こういう丸彫りと線彫りの両者を一緒に使っております。

(30)•同じように外反。

(31)•これなんかは、猿投にも出てくる文様の一つでありますが、牡丹唐草の一種の崩しで、ある意味では、西アジア的な感覚です。

(32)•これは、蝶々。たぶん双蝶ですね。蝶々が両側から向い合っている。

(33)•これなんかは、非常に簡単な篦彫りの花文様ですね。

(34)•これなんかも猿投に出てくる。これは、蓮弁でしょうけれども、こうしたものもあります。牡丹文様が一番多いのでありますが。

(35)•これなんかは、牡丹唐草。

(36)•次の2枚は、エジプトのフスタートから出た陶片であります。越州窯は大量にエジプトに輸出されております。これはまさに余姚上林湖窯の製品であります。確かに、寧波の近辺の窯だと思っていたのですけれども、余姚だろうという。一番いい窯のものがいっている。エジプトにも売っているのです。

(37)•これは、裏側で、御覧のように外反している。

(38)•最後にこれが現在、中国で一番古いといわれている後漢時代の青磁の破片です。やはり寧波のすぐ南の、鄞県の郭家峙窯というところから出たものであります。一番古い、1世紀ないし2世紀初めの青磁というのは、このように、印文と申しておりますが、素地に型文様を押します。その素地は、案外白いのです。中国の人は、カオリンだといっていますが、それに型を押しまして、その上に豆青色の釉を掛けています。それまでも、青釉というものはありますけれども、それは、自然釉と同じように不安定なんです。青いところもあれば褐色のところもある。古瀬戸のようなものでありまして――不安定でありますが、このころになりますと、青磁釉が安定してきれいな青になります。ですから、青磁の一番古いものと認定しているのであります。最初のものは、この隣りの、上虞県の小仙壇窯からも出てまいります。

(39)•これは、その把手の部分でありますが、このようにきれいなのが、漢の時代の青磁であります。どうも大変時間を過ぎて恐縮です。これで終ります。（拍手，講演終了）